

新潟県立近代美術館便り

# 雪椿通信



第18号

2002.4

# 「長岡現代美術館賞」回顧展 1964-1968

4月20日(土)～6月9日(日)

今から38年前、長岡市坂之上町に私立美術館が誕生しました。美術館自体が国公立立合わせでも、まだ数えるほどしかなかったときのことです。そのような時代にこの館は「現代美術館」を名乗りました。今でさえ、「現代」と冠した美術館は片手で足りるほどしかないのです。この果敢な館こそ、今では伝説的な存在の「長岡現代美術館」でした。

夏8月に開館したばかりでありながら、11月末にはもう「第1回長岡現代美術館賞展」を開催しています。こ



第2回展公開審査会の様子

れは「現代美術の推進に積極的に寄与することを念願として」計画された一種のコンクールでした。審査員たちが将来性のある若手作家たちを選抜招待し、ただ一人に「長岡現代美術館賞」を与えて顕彰しようというものです。今から見ても大胆かつ斬新であったのは、審査の過程を公開していたことです。審査員の面々は作品を飾った展示室内で、聴衆も、はたまた組上の作家自身も一緒の中で論陣を張り、賛否に熱弁を奮いました。多数決ではなく議論の末に賞を決しようとする姿勢から熱い審査はおのずと延び、第1回展では4時間、第2回展では延々6時間以上にも及んだといえます。そして「館賞」受賞者に与えられるのは、名誉と並んで賞金100万円。30歳前後の新人に対して当時これだけの金額を出してしまうことも驚きでした。

翌年の第2回展からは日本だけでなく世界に向けて「館賞展」は開かれました。外国から審査員を迎え、作家を招いたのです。欧米の先進動向を追いかけるのではなく、対等に渡り合おうではないかという趣向です。言うなれば、美術による国対抗試合です。残念なことに当時の激論の様子を伝える録音は未だに発見されていない

## ポンピドーセンター&シャガール家秘蔵作品

# マルク・シャガール展に向けて 7月20日(土)～9月23日(月・祝)

シャガールの名前と作品を知らない人は、今では少ないかもしれません。その名声は存命中のからのものではありましたが、しかし今日の、たとえば極東の島国日本において、彼の名を冠した展覧会が毎年のように開かれ、そのたびに人々が大挙して会場を訪れるような状況を、シャガール自身ですら想像していたでしょうか。

ちなみに日本での紹介は、『中央美術』第九巻第九号(1923年9月)に掲載のダウヴレル「シャガールの画と其心境」から今日まで、四分の三世紀以上が過ぎました。その間、1963年の大展覧会などを契機に着実に紹介は継続され、いつしか、もっとも知名度のある、人気の高い画家の一人となりました。現在では国内の少なからぬ美術館に作品が所蔵され、出版物の刊行もあとを絶たず、展覧会の開催も他の画家を圧倒します。しかしながら、その人気の高さが誤解を呼ぶのか、シャガールを一般受けのする画家、さらに悪く言えば、叙情性に流れた、時にはマンネリとも受け取れる作風の画家とみなす評価もないわけではありません。

それが事実かどうか、シャガールの本質が何かを考察するのが本来ですが、ここでは次の事実を伝えるこ

とでそれに代えたいと思います。先日、シャガールについて語り、あるいは翻訳紹介をした日本人を目につく限りリスト化する必要がありました。すると、『中央美術』第十一巻第十二号(1925年12月)誌上で、ペラ・ウィッツ「シャガールと藤田」を翻訳した甲斐二朝という人から、つい最近の展覧会カタログに至るまで、その数は合わせて軽く200人を越えてしまいました。もとより、シャガールに関する膨大な仕事の全てを網羅できるはずもなく、リストすらサマリーにすぎません。とはいえ、これはインターネット検索で求めたような数字ではなく、筆者が実際に目し、読むことが可能なものに限られた数です。しかも、そのリストには、美術に関わる大家から若手まではもとより、小説家や詩人、歌人や俳優など、広範な分野の名前が並びました。いかに多くの才能がシャガールを語ろうとしてきたのか、その事実を概観しただけで目まいがするような気がしました。

同じような感慨はまた、展覧会に足を運んだ大勢の人たちについて思いを巡らせる時にも、湧き起こるかもしれません。展覧会の開催数と、それぞれの入館者数を考え合わせると、予断を恐れずに言うならば、おそらく



のですが、雑誌等の記事で5回展までを概観すると、興味深いことに何度か似たような対立が起こっています。概して外国側審査員は若い作家であってもその時点での作品の「完成度」「質」を重視する一方、日本側はたとえ作品が未熟に見えてもその「将来性」「可能性」を買おうとしていました。

もちろんこれは立脚点の相異からくるずれであったのですが、どちらの主張が正しかったのか、最終的には今回展示される現存作品が語るはずです。30年以上の時間を経た今、作品は単に懐かしいだけのものに成り果てているのか、未だ輝きと力を失わずにいるのか。今回の展覧会ではその当時の評者の眼、制作者の腕、そして現在の企画者自身の構想も公平に試されてしまいます。不安と楽しみが交錯します。

当初の10年計画の半分、5回展までで終息してしまった「館賞展」。新幹線もまだ開通ならず東京からの時間的距離がひたすら遠かった時代に、中央を差し置いて世界の最先端を地方にもたらしたその試みは、将来を見越した「米百俵」精神の美術版とも言えそうです。

(主任学芸員 桐原 浩)



高本盛治郎  
(10人のインディアン) 1964年より  
第1回展受賞作品



山口勝弘  
(作品) 1967年  
第4回展受賞作品

「最も多くの日本人が、その作品を見たことのある国外の画家はシャガール」ということになるのではないかと思います。

ある画家に対して、心を込めて仕事をした人たち。それから、各展覧会に足を運び、彼の作品を目にした人たち。個別に浮遊した、それら無数の日本人という存在がシャガールによって結び付けられてきたことに思い至った時、そういう画家がいてくれたことに、ほとんど感謝したいような気持ちになります。と同時にまた、力による勝利とは全く違った、長いスパンで芸術だけがなせる、別の闘い方もあるのだということを、私たちに教えてくれているようにも思えるのです。

(主任学芸員 佐々木奈美子)



《青いサーカス》1950-52年



《面をかかげる二重川像》1917-18年

ポンピドゥーセンター所蔵  
Collection du Centre Georges Pompidou  
Musée National d'Art Moderne  
CADAP, Paris & MCF, Tokyo, 2001

# 平成13年度 新収蔵品

## 〈世界の美術〉

### 油彩画

- ◆モーリス・ドニ  
《ベンガル虎、パッカス祭》2点組  
1920年 油彩、カンヴァス



モーリス・ドニ《ベンガル虎、パッカス祭》

### 版画

- ◆ジャック・カロ  
《戦争の惨禍(大)》  
18点組 1633年  
エッチング
- ◆美術家集団ブリュッケ  
《第1回ブリュッケ異図録》1910年  
印刷(オリジナル木版画20点)
- ◆ロイ・リキテンスティン  
《睡蓮と柳》1992年 ステンレス・  
スチール板にスクリーンプリント

- ◆ロバート・ラウシェンバーク  
《乱闘(白霧シリーズ)》  
1975年 観賞用ファブリックに溶剤  
複写、厚紙コラージュ

### 資料

- ◆ヴァシリー・カンディンスキー  
《木版画集》  
1909年刊行  
ヘリオグラヴィールによる複製

## 〈日本の美術〉

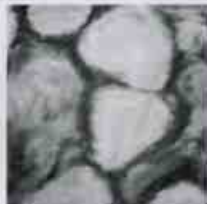
### 日本画

- ◆瀧木清方《春の夜のうらみ》  
1922年 絹本彩色
- ◆土田麦徳《牽牛花》  
1935年頃 絹本彩色
- ◆星野真吾  
・《赤い心象》1963年 紙本彩色  
・《消えてゆく》1987年 紙本彩色
- ◆青山亘幹《夏》1998年 絹本彩色
- ◆伊藤 彬  
・《山水-くずるる2》1998年  
麻紙、木炭、墨  
・《山水-亡徳丁》2000年 麻紙、墨
- ◆伊藤彰耳《出会・ニヶ月》  
1996年 紙本彩色
- ◆千住 博《WATERFALL》  
2000年 紙本彩色
- ◆中島千波  
・《空※98-9 五蘊皆空》  
1998年 紙本彩色  
・《空※98-9 五蘊皆空「阿」》  
1998年 紙本彩色  
・《空※2000-9 空即是空》  
2000年 紙本彩色
- ◆林 功《綱引き》1998年 紙本彩色  
・《懐い出》1996年 紙本彩色
- ◆米谷清和  
・《街一朝》1986年 紙本彩色

- ・《街-午後》1986年 紙本彩色
- ・《街-夕方》1986年 紙本彩色
- ・《街-夜》1986年 紙本彩色

### 洋画

- ◆篠原有司男《スパイダーマン》  
1981年 油彩、カンヴァス
- ◆清水 伸《いつの世までも》  
2000年 油彩、カンヴァス
- ◆丸山直文  
・《DHL》1992年 アクリル、コットン  
・《Kind》1994年 アクリル、コットン



丸山直文  
《DHL》

### 版画

- ◆深澤索一  
・《相撲》1936年 木版  
・《石仏(仮題)》1943年 多色木版
- ◆山口啓介《水路一王の方舟》6枚組  
1990年 エッチング

### 平面

- ◆郭徳俊  
・《TIME JUNE 29, 1981》1981年  
タイム誌、顔彩、カンヴァス

- ・《位相-7612》1976年  
セリグラフ、アクリル、パネル
- ・《時間、SATURDAY, MAY, 1980》  
1980年 新聞紙、油彩、ドロー  
イング、カンヴァス

### 素描

- ◆小林古怪《異端(下絵)》  
1914年頃 紙本、墨、木炭

### 彫刻

- ◆淀井敏夫《エビダウロス・追想》  
1984年 ブロンズ

### 立体

- ◆八木一夫《真珠取りの少女》  
1969年 鍍金、銅
- ◆坂爪勝幸《阿叶》1994年 陶、焼きメ  
写真
- ◆渡辺義雄

- ・《東大寺 法華堂の内部》  
1969年頃 モノクローム・プリント
- ・《東大寺 鐘樓の内部構架》  
1970年以前 モノクローム・プリント
- ・《東大寺 大湯屋の鉄湯船》  
1970年以前 モノクローム・プリント

- ◆岡田紅陽《富士写真》21点  
モノクローム・プリント

### 資料

- ◆亀倉雄策 遺品、写真、スクラップブ  
ック、ダイアリー、雑誌、装丁本など

## 〈新潟の美術〉

### 日本画

- ◆津端道彦《うたげの装》  
1911年 絹本彩色
- ◆岩田正巳《浪名を渡る源九郎義経》  
1936年 絹本彩色
- ◆三輪見久  
・《おおぞら》1979年 紙本彩色  
・《山川悠遠》1997年 紙本彩色  
・《秋氣》2000年 紙本彩色
- ◆山崎隆夫  
・《新雪》1980年 紙本彩色  
・《茄子》1990年 紙本彩色  
・《雨》1993年 紙本彩色

### 洋画

- ◆宮 芳平《カーテンに》  
1914年 油彩、カンヴァス



津端道彦  
《うたげの装》

- ◆佐藤三郎  
・《フォンテンブロー》1927年  
油彩、カンヴァス
- ・《パリ郊外》1927-28年  
油彩、カンヴァス
- ・《パリ郊外》1927-28年  
油彩、カンヴァス

### ◆峰村リツ子

- ・《Y氏像》1929年  
油彩、カンヴァス

- ・《桜井浜江像》1930年  
油彩、カンヴァス

- ◆西村 満《黎明》  
1991年 油彩、カンヴァス

### 平面

- ◆長沢 明  
・《Melodical Note》1995年  
木、岩絵具、箔、真鍮、アクリ  
ル、麻布、和紙、鉛
- ・《Bookboard-Blue》1999年  
木、本、コラージュ

### 版画

- ◆吉田志麻《夜空-マサイマラ》  
1997年 木版



今年は、今までよりも

## ワークショップを充実させます。

### おとなも、こどもも、楽しんでね!

新潟県立近代美術館では、展覧会以外にもいろいろな催しをしています。講演会、美術講座、映画鑑賞会、コンサート…。美術館には「見る」「聞く」「学ぶ」の要素がいっぱいです。

そこに、さらに「作る」「見つける」の要素を充実させるため、今までよりもワークショップの種類と回数を増やします。ワークショップの種類は二つ。

● **びじゅつ☆体験隊**……「作る」ことを中心に、アーティストになった気分を楽しみます。

● **歩いて発見! びじゅつかん**……美術館の普段行かない場所や周辺などを歩きながら、知らなかった美術館の姿を発見します。

スケジュール(予定)は下記のとおり。親子で、お友達同士で、そしてもちろん個人でも、どうぞ気軽に参加してください。

#### びじゅつ☆体験隊

● 5月4・5日「つなげて、組み立てて あそぼう」(申込不要)

● 8月3・10・18日「空にうかぶものたち-シャガールのように」(申込不要)

● 10月13日「住んでみたいね! こんな家」(要申込)

**歩いて発見! びじゅつかん** 6月22日、7月28日、9月22日、10月27日

※詳しくは、新潟県立近代美術館学芸課

ワークショップの係までお問い合わせ下さい。

TEL.0258-28-4113

## 新しい県立美術館がオープンします

新潟市万代島地区に建設中の朱鷺メッセ内に、2003年春、2つ目の県立美術館がオープンします。

新美術館(仮称)は、国際的な芸術文化の交流の場として、海外展を含めた企画展や、近代美術館と連携した所蔵品展を行うほか、1945年以降の現代の美術や、日本海を取りまくアジア各国の美術なども視野に入れた個性的な活動を目指していきます。また、新潟県出身・在住の作家を対象にした展覧会や、公募展なども企画し、新たな価値や才能の発掘にも努めていきます。

開館までは、県庁内にある「新美術館開設準備室」が窓口です。

県民の皆様が親しまれる美術館になるよう、名称は今後、一般の方々から募集する予定です。

県立近代美術館とともに、新しい美術館をどうぞよろしくお願い致します。

#### 【お問い合わせ】

新潟県教育庁文化行政課  
新美術館開設準備室

TEL.025-285-5511(代)

内線3919・3920・3921



朱鷺メッセ内ホテル・業務ビル(平成14年2月現在)  
\*新美術館は左横5階部分

### 表紙作品解説 鍋木清方《春の夜のうらみ》大正11年(1922) 絹本彩色・軸装 縦185.2×横100.8cm

当館では昨年度、鍋木清方の密展出品作を新しく収蔵しました。美人画を得意とした清方ですが、この作品では歌舞伎舞踊の「道成寺」を題材に、怒めしく鐘を見上げる仕草の踊り手を描いています。画面全体に薄墨を刷くことによって、ほの暗い春の闇を表現しました。背景にはほんやりと白く浮かび上がる夜桜の枝。女性がまとう着物の朱の鮮やかさが、胸の奥に秘めた激しい想いを感じさせます。

挿絵画家としてその画業を出発した清方は、大正期に入ると官展作家としての地位を固め、数々の名作をこの時期に発表しました。本作品は個人蔵となっており、長く世に出ていなかったものです。保存状態が悪く、後年の補彩も認められたため、購入にあたっては汚れを除去するとともに、出来る限りオリジナルの状態に近づくよう修復をしました。展示室1で、5月12日まで展示する予定です。ぜひお越しください。

### 平成14年度下半期 展覧会のおしらせ

小山正太郎と「書ハ美術ナラス」の時代 10月4日～11月17日  
福島県立美術館コレクション展 2003年2月15日から3月23日

### 美術館友の会からのお知らせ

平成14年度会員募集します。

新潟県立近代美術館友の会は、美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて、会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。常設展の無料観覧や企画展無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。

1960年代の思い出を展示します。

友の会では、「長岡現代美術館賞」回顧展1964-1968に関連させて、展示会を開催します。会員はもとより、広く呼び掛けに応じて貸出ししていただいた1960年代の思い出の品々を美術館2階ギャラリーにて展示します。

詳しくは、友の会事務局までお問い合わせください。

【問い合わせ先: 友の会事務局 TEL.0258-28-4111】

#### 利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館(8/12(月)は開館し翌日も開館、9/17(火)は開館)および、9/24(火)～9/27(金)、12/24(火)～1/3(金)、3/27(木)～3/31(月)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、展示室1・2・3もご覧いただけます。

・展示室1・2・3観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(後期)・高校・高等専門学校……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2021 新潟県長岡市宮町字屋敷278-14

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.laijanet.gr.jp/kinbi/index.html

e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2002.4.1発行 4,000部

# 美術雑筆

## 「仏像の顔」

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

今回は日本の仏像の顔をめぐると話題です。

法隆寺金堂の釈迦三尊像は、光背の銘文によって推古天皇31年（623）に聖徳太子の冥福を祈るために造られたこと、作者は鞍作首止利仏師（くらつくりのおびととりぶっし）であったことがわかります。日本ではじめて仏像が本格的に造られるようになった時期のもので、その顔の表現の特色として、杏仁形の目とか唇の両端が上がったいわゆるアーケイック・スマイルなどが挙げられることはよく知られています。この特色だけからでも、これが当時の日本人の顔を写したものでないことは明らかですが、さらにその横顔を見る時、額から鼻筋へかけてなだらかな線を描いて続いていく点が注目されます。この点は、先に述べた特色と共に朝鮮三国時代、もとを辿れば中国南北朝時代の仏像の表現を受けついでいます。しかしこれは日本人や漢民族を含むモンゴロイド（黄色人種群）の顔とはいえません。コーカソイド（白色人種群）の顔の特色で、ギリシャ人やインド人に見られるものです（ミロのヴィーナスを思い出して下さい）。モンゴロイドでは、額からの線が両目の間に当たる部分で一度後にひっこんでから、鼻梁が隆起していくのです（あまり高くとはいえませんが）。仏像がはじめて造られたのはヘレニズムの流れを汲むガンダーラ、それと中インドでした。そこにあらわれた顔の特色を中国でも引きずっていたわけです。

止利仏師は間近にいる人間の顔を写して釈迦三尊の顔をつくったのではありません。おそらく朝鮮からもたらされた仏像を手本にして仏像をつくったのです。釈迦三尊の耳の彫り方を見てもそのことはいえます。それは人間の耳としてはちょっと不思議なひだをつくっています。その形のもとを辿れば、やはり中国南北朝時代の仏像の耳に行きつきません。



大日如来像（奈良・円成寺）運慶作 1178年

釈迦三尊像に見るような、額から鼻梁へとなだらかな線につながる顔の作りは、中国や日本の仏菩薩像では実はその後長い時代にわたって続きました。仏像の表現がもっとも日本化したといわれる、平安時代後期の平等院



釈迦如来像（法隆寺金堂釈迦三尊像の内）  
止利仏師作 623年

鳳凰堂阿彌陀如来像（1053年、定朝作）でもそれは変わりません。そこには身近な人間の顔とは一線を画した、仏像の顔としての制約が働いたともいえるでしょう。また逆に、作家としてこれまでの造型方式をはなれ、自分の目で見えた人間の顔のかたちを仏像の造型にもちこむことがいかにむずかしかったかを物語っているともいえます。しかし平安時代の末、安元2年（1176）に青年期の運慶が造った円成寺の大日如来像では、額と鼻梁の関係が日本人らしくなり、鼻先も日本人らしく丸くなりました。さすがに運慶は身近な人の顔をよく見て、それを仏像の顔に表現してしまったのです（もっともその萌芽は1151年の長岳寺阿彌陀三尊像に見ることができます。運慶の一世代前の同じ系統の仏師の作です）。

以上に仏像の顔はある時期まではあくまでも仏像の顔であったことを述べました。それでも仏教がインドから各地域に伝わり、各地で仏像が造られるとその土地なりの顔になっていったことも事実です。中国ではインドやガンダーラよりよほど平たい顔になりました。また同じ地域でも当然時代や年代によって仏像の顔だちに変化があります。そのことについては別の機会にゆずりたいと思います。